

研 究

過去20年間の病歴統計 (第1報)

科別、年齢別にみて

藤 田 幸 代¹⁾ 田 中 美 津 子¹⁾ 斉 藤 イ キ¹⁾
 川 口 堅 一¹⁾ 鈴 木 丈 吉²⁾ 杉 山 一 教²⁾

当病歴室の概要

当病歴室は1968年1月より、それまで各科別に医事課で保管されていた退院病歴の中央管理を開始した。開始にあたって共通可能部分ではできる限り統一用紙とすることとし、病歴一号用紙(表紙)は全科統一とした。場所は医局内にあった図書室に併設され、業務は医局図書係が兼務し、保管庫は図書室脇の空き部屋に木製の棚を取り付けて病歴管理を開始した。

病歴管理方法は、退院順に全科通しの病歴番号を与え、1回の退院につき1カルテとしている。各種データの引出しに対応するために、氏名索引、病名索引の2種類のカードを作成した。氏名索引では個人別のカードを、あいうえお順に並べた。このカードは科別を問わず、退院の度に追加して書き加えて行くため、一目で当院における履歴がわかる。病名は国際疾病分類(ICD)にしたがって分類し、病名索引カードを作成した。このカードでは病名のほか各種の索引もでき、統計カードとしても利用した。病名索引カードはパンチカード、次いでマークシートを使用していたが、1982年分よりパソコン入力に変更したため、現在は使用していない。

人員は発足当時は1名、2年後の1970年より2名、1986年4月より2.5名となり、病歴の保管と貸出、1年毎の年間統計のまとめのほか、医局図書室の図書管理および医局雑務を行っている。

病歴貸出数は著しく増加し、最近では年間10,000冊を越えることもある。

1971年、増築の際、図書室に隣接した保管庫に移動棚が設置された。現在、この保管庫には、最近の5年分が収納され、それ以前の病歴は、院外の2つの保管

庫に収納されている。

年間総退院患者数

病歴室発足当時の1968年の年間総退院患者数は4,875名であった。5年後の1973年は437名(9.0%)増の5,312名、9年後の1977年には1,128名(23.1%)増加して6,003名、1981年は2,104名(43.2%)増の6,979名、その翌年には新館病棟が完成し、前年より769名増加して7,748名(1968年と比較して、58.9%増)となった。

その後も年々増加して1988年の年間総退院患者数は8,987名(84.3%増)であった(表1)。

表1 総退院患者数と平均在院日数

年 度	総退院患者数	平均在院日数
1968年(S43)	4,875(名)	32.5 (日)
1969年(S44)	4,773	31.5
1970年(S45)	5,066	29.6
1971年(S46)	5,023	28.7
1972年(S47)	5,131	26.3
1973年(S48)	5,312	25.8
1974年(S49)	5,786	25.4
1975年(S50)	5,683	25.4
1976年(S51)	5,789	25.7
1977年(S52)	6,003	24.6
1978年(S53)	6,195	24.5
1979年(S54)	6,144	24.2
1980年(S55)	6,523	21.3
1981年(S56)	6,979	20.3
1982年(S57)	7,748	22.1
1983年(S58)	8,243	21.5
1984年(S59)	8,192	21.4
1985年(S60)	8,359	21.4
1986年(S61)	8,539	21.7
1987年(S62)		
1988年(S63)	8,987	20.5

1) 中央総合病院 健康管理課病歴室

2) 中央総合病院 内科

平均在院日数

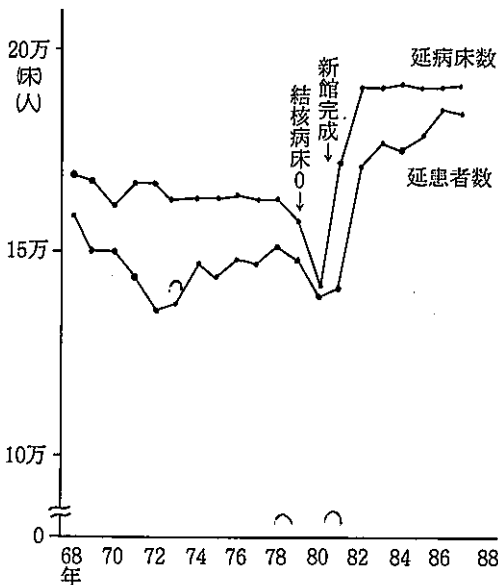
平均在院日数は患者数とは対照的に年々短縮している。1968年は32.5日であったが、1979年には8.3日短い24.2日となった。1980年には結核病床が廃止され、1年で2.9日減少して21.3日となり、その後は平均在院日数に大きな変動はない(表1)。

病床利用率

各年度の延病床数を図1に示した。この20年間に病院は数回の増改築が行われたため病床数に変化があり、1968年は結核病床48床を含む460床、その後結核病床がなくなった1979年9月から新館病棟完成までの1981年5月までは病床数の最も少ない384床となった。新館病棟完成により522床となり、現在に至っている。延べ病床数と延べ患者数の比率が病床利用率となり、開きの大きい1972年が80.9%、病床数が20年間で一番少なかった1980年は延べ患者数とほとんど差がなく、利用率は98.9%であった。その後の利用率は1982年89.9%、1983年93.0%、1986年97.3%、1988年96.4%であった。

ちなみに、1987年の厚生省病院報告による、全国平均病床利用率(一般病床)は83.3%であり、当院の平均利用率はかなり高かった。

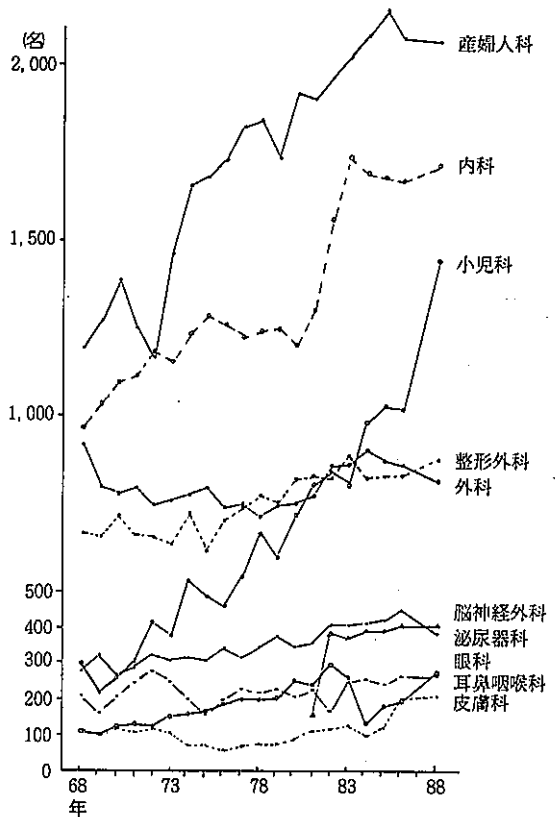
図1 延病床数と延患者数



科別退院患者数

20年間で特に患者数の増加が目だったのは小児科であった。1968年310名から1988年1,460名、4.7倍になっていた。そのほかでは眼科1968年118名から1988年291名、約2.5倍、皮膚科122名から224名、1.8倍、内科978名から1,732名、1.8倍、産婦人科1,214名から2,079名、1.7倍となっていた(図2)。

図2 科別退院患者数

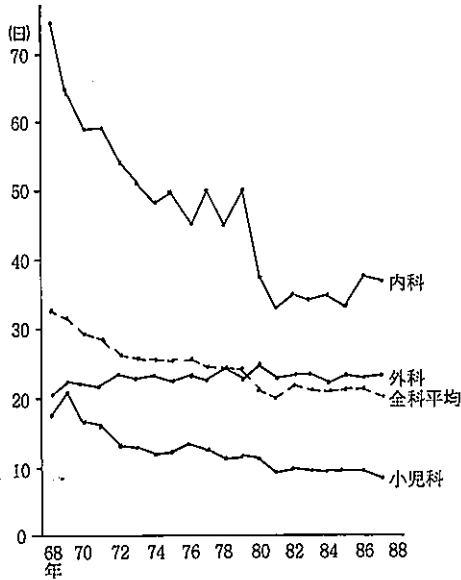


科別平均在院日数

内科では1968年74.6日であったが、結核病床がなくなった1980年は半分の37.4日となった。患者数が大きく増加した小児科でも1968年17.3日から、1988年は半分の8.6日となっていた。外科の平均在院日数は、20年間に大きな変動はみられなかった。平均在院日数の

長いのは神経内科(1988年、41.1日)、脳神経外科(1988年、40.2日)であり、脳血管疾患の長期入院によるものと思われる(図3)。

図3 各科別平均在院日数



年齢別患者数

患者数の最も多い年代は20年間を通して、20~29才であった。1968年1,426名で年間退院患者の29.2%を占めていた。この比率は年々下降しており、1988年1,601名(17.8%)となった。この年代は、女性の妊娠・分娩のための入院が多くを占めているためであり、それを除くと1973年以前は40~49才、次いで50~59才、60~69才の順であった。1974~1981年は60~69才、1982年以降は70才以上がトップを占め、入院患者の高齢化がうかがわれる。

小児科増加の主体となる、0才、1~9才も増加しており、0才では1968年208名(4.3%)から649名(7.2%)、1~9才では1968年419名(8.6%)が1988年1,194名(13.2%)となっていた。

20~29才のほかに、10~19才も減少しており1968年489名から1988年428名、比率では、10.0%から4.8%と半数になっていた。20~29才男性も1968年289名から1988年182名へと減少していた。特に消化系と外傷の減少が著しかった(表2)。

表2 年齢別退院患者数

年度	年齢		1~9才	10~19才	20~29才	30~39才	40~49才	50~59才	60~69才	70~才
	名	%								
1968年 (S 43)	208	(4.3)	419(8.6)	489(10.0)	1,426(29.2)	659(13.5)	546(11.2)	506(10.4)	433(8.9)	189(3.9)
1969	191	(4.0)	334(7.0)	372(7.8)	1,465(30.7)	653(13.7)	561(11.7)	499(10.5)	489(10.2)	209(4.4)
1970	187	(3.7)	365(7.2)	461(9.1)	1,614(31.9)	671(13.2)	516(10.2)	512(10.1)	507(10.0)	233(4.6)
1971	179	(3.6)	432(8.6)	413(8.2)	1,566(31.2)	622(12.4)	552(11.0)	509(10.1)	501(10.0)	249(5.0)
1972	225	(4.4)	486(9.5)	376(7.3)	1,448(28.2)	616(12.0)	559(11.0)	523(10.2)	618(12.0)	280(5.4)
1973 (S 48)	219	(4.1)	466(8.8)	323(6.1)	1,573(29.6)	638(12.0)	619(11.6)	504(9.5)	552(10.4)	418(7.9)
1974	291	(5.0)	572(9.9)	327(5.6)	1,711(29.6)	727(12.6)	551(9.5)	554(9.6)	587(10.1)	466(8.1)
1975	274	(4.8)	561(9.9)	250(4.4)	1,723(30.3)	664(11.7)	607(10.7)	531(9.3)	574(10.1)	499(8.8)
1976	253	(4.4)	582(10.1)	294(5.0)	1,783(30.8)	647(11.2)	554(9.6)	545(9.4)	666(11.5)	465(8.0)
1977	278	(4.6)	624(10.4)	306(5.1)	1,878(31.3)	613(10.2)	558(9.3)	547(9.1)	641(10.7)	558(9.3)
1978 (S 53)	298	(4.8)	706(11.4)	321(5.2)	1,826(29.5)	643(10.4)	558(9.0)	616(10.0)	635(10.2)	592(9.5)
1979	301	(4.9)	687(11.2)	285(4.6)	1,647(26.8)	712(11.7)	555(9.0)	614(10.0)	689(11.2)	654(10.6)
1980	392	(6.0)	755(11.6)	317(4.8)	1,675(25.7)	811(12.4)	543(8.4)	654(10.0)	637(9.8)	739(11.3)
1981	459	(6.6)	761(10.9)	332(4.7)	1,648(23.7)	905(12.9)	589(8.4)	745(10.7)	773(11.1)	767(11.0)
1982	443	(5.7)	849(10.9)	373(4.9)	1,726(22.3)	932(12.0)	632(8.2)	886(11.5)	904(11.6)	1,003(13.0)
1983 (S 58)	639	(7.8)	763(9.3)	381(4.4)	1,693(20.6)	1,015(12.3)	633(7.7)	965(11.7)	980(11.9)	1,174(14.2)
1984	506	(6.2)	949(11.6)	398(4.9)	1,701(20.8)	1,080(13.2)	602(7.4)	896(10.9)	907(11.1)	1,153(14.0)
1985	565	(6.8)	962(11.5)	365(4.4)	1,716(20.5)	1,124(13.4)	651(7.8)	832(9.9)	954(11.4)	1,190(14.3)
1986	613	(7.2)	983(11.5)	360(4.2)	1,717(20.1)	1,067(12.5)	587(6.9)	956(11.2)	1,026(12.0)	1,230(14.4)
1987	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1988 (S 63)	649	(7.2)	1,194(13.2)	428(4.8)	1,601(17.8)	1,076(12.0)	624(6.9)	938(10.5)	1,061(11.8)	1,416(15.7)

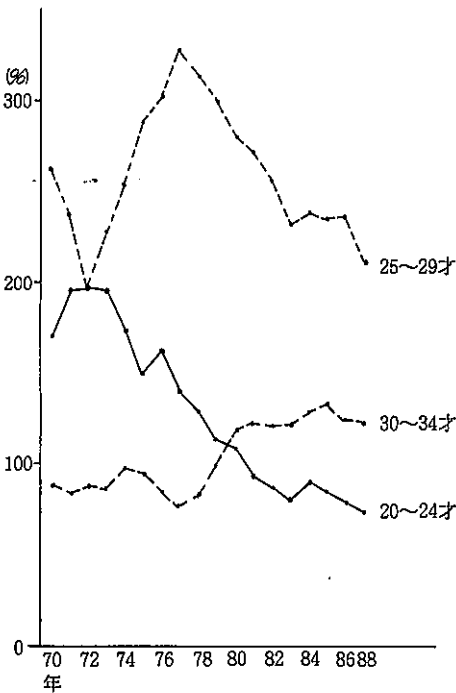
() 内は各年度における構成率

20～35才の女性患者数の推移

女性の20～34才の変化を図4に示した。この年代の約80%は妊娠・分娩のための入院である。20～24才は1972年、25～29才も1977年をピークに減少している。一方、30～34才は1978年から増加し、1980年以降は20～24才を凌駕している。

この増減には第一次ベビーブーム期に生まれた「団塊の世代」の女性の出産が大きく影響していると思われる。また20～24才の減少は、一般的な結婚年齢の上昇により、出産年齢も上昇していることを反映しているものであろう。

図4 20～34才女性の構成比



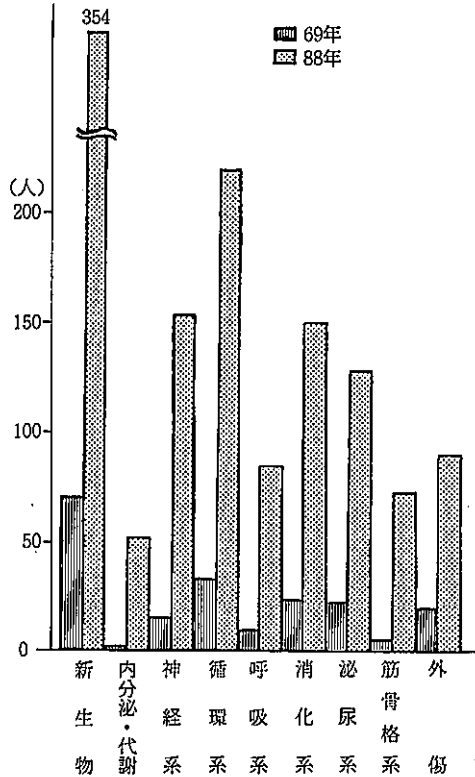
70才以上の患者数の推移

1968年189名から1988年1,416名と7.5倍に増加し、比率も3.9%から15.7%に上昇した。老人医療無料化が実施された1973年は、前年に比して138名、比率にして2.5%と大幅に増加した。

病類別でみると全ての疾患群で増加し、特に新生物と循環系（脳血管疾患を含む）が多数を占めている。60日以上長期入院の40%はこの年代が占め、他の年代と比べると平均在院日数も長く（1988年は38日）、延べ病床数に占める割合は29.2%となり、年間を通し

て全入院患者の3人に1人は70才以上ということになる（図5）。

図5 70才以上疾患別患者数



ま と め

過去20年間の入院患者の病歴統計を、科別、年齢別にみて検討した。

- 1) 退院患者数は1.84倍に増加し、平均在院日数は対照的に12日間短縮していた。
- 2) 平均病床利用率は96.3%と全国平均を上回っていた。
- 3) 科別では、全科で増加がみられるが、特に小児科の増加が著しかった。
- 4) 年齢別の退院患者数は、70才以上が7.5倍に増加し、現在も増加の傾向にある。

参 考 文 献

- 1) 厚生省の指標—国民衛生の動向—36:460,1989.